

医療領域における多職種連携教育 (IPE) の 教育領域への転用可能性

○荊木まき子 (就実短期大学)

森田英嗣 (大阪教育大学)

キーワード：多職種連携教育 (IPE), 医療領域, 教育領域への転用

問題と目的

現在学校では、不登校や発達障害、虐待等、児童生徒の様々な問題の対応に、チーム学校 (文部科学省, 2015) として、スクールカウンセラー (以下 SC と表記) やスクールソーシャルワーカー等、多様な職種が教員と協働して子どもの支援に取り組むことが、緊急課題として挙げられている。しかし、学校場面にてこれらの異職種が教員との相互理解が難しいために、協働が取りにくいことが指摘されている (河村・武蔵・粕谷, 2005)。

一方医療領域では、多職種連携教育 (Inter-Professional Education: 以下 IPE と表記) がチーム医療や高齢者包括的ケアの観点から、看護や医学、薬学、作業療法等の学部・学科合同で教材開発や演習、実習を行い、カリキュラムや評価法が蓄積されつつある (小林・黒白・鈴木ら, 2012)。

IPE の必要性は、教育領域でも同様であり、医療領域での IPE の知見は、教育領域においても有用なものが存在すると考えられる。従って本研究では、医療領域における IPE の知見を概観し、教育領域への転用可能性の検討を目的とする。

方 法

Cinii での「多職種連携教育」「IPE」のキーワードから 79 件の論文を入手し、読んだ上で「カリキュラム」「カリキュラムと教育効果」「プログラム」に関連し、教育内容が詳細な 25 件を選択した。

選択した文献を、(1)対象者：どの学科の何年次を対象とするのか (2)カリキュラムの内容：どのような内容の学習なのか、(3)評価方法：教育効果の測定方法といった 3 つの観点から検討した。

この 3 観点を軸に、医療と教育領域での IPE を比較検討し、教育領域での転用可能性を検討した。

結 果

(1) **対象者**：対象組織では大学が 20 件、その内全学年対象が 13 件と一番多く見られた。他には大学院が 2 件、大学～社会人が 1 件、社会人が 3 件みられた。大学での参加学部・科は看護が 20 件と最も多く、続いて医学 14 件、理学療法 11 件であるが、学部・学科だけでも 18 種類と多岐にわたった。

(2) **カリキュラムの内容**：大学・大学院の学習内容 23 件を抜き出し、学年毎に多い 1・2 位を挙げた。順に (数字は該当数)、1 年生では IPW (inter professional work) の必要性・基本的考え方 (5)、人の尊厳と倫理観の講義、病院・施設見学 (4)、2 年生は他職種理解 (8)、IPW の必要性・基本的考え方、

チーム形成のスキル講義・演習 (3)、3 年生は模擬事例の PBL (Problem based learning)、チーム形成のスキル講義・演習、4 年生以上・院生は多職種チーム実習 (5)、模擬事例の PBL (4)、模擬患者の支援計画作成・カンファレンス (4) が見られた。

(3) **評価方法**：授業終了時のアンケートが 8 件、大学独自の連携行動尺度を開発・実施が 4 件みられた。IPE を測る尺度として、受講者のコミュニケーションや効力感の変化をみる Kiss-18 や GSES、IPE の志向性を測る RIPLS (Readiness for interprofessional learning scale) の日本語版 (Tamura, 2012) 等が見られた。パフォーマンス課題としては、支援計画の作成・発表が 4 件、多学部による糖尿病教室 3 件等が見られた。

考 察

医療領域 IPE の概要：IPE の実践は卒前教育として発展し、全学年を通じた系統的学習が設定されていた。これらの系統的学習は、千葉大学の各学年でのキーコンピテンシー (酒井・朝比奈・前田他, 2014) に代表されるように、系統的に積み上げる必要性を示唆していた。カリキュラムの内容でも、多職種連携の必要性や病院・施設の見学を通じて連携の基本的事項をおさえ、チーム形成のスキルや他職種を理解した上での模擬演習、多職種実習と学習が系統立てられていた。評価方法では、授業終了時のアンケートのみならず、大学独自の連携行動尺度開発や IPE を測る尺度、パフォーマンス課題等、エビデンスが蓄積されていた。

教育領域との比較：上述の 3 観点を教育領域の報告と比較したところ、教育領域では対象者は一部学年に留まり、カリキュラムの内容も模擬事例の検討 (瀬戸, 2011; 荊木・森田・鈴木, 2015) や他職種理解 (荊木・森田・鈴木, 2015) の報告が部分的に見られる程度に留まった。また評価方法も授業終了時のアンケート (瀬戸, 2011; 荊木・森田・鈴木, 2015) に留まり、尺度を用いてエビデンスをみた報告は見当たらなかった。

教育領域の IPE が遅れた背景に、医師や看護師といった多様な職種が混在する医療領域と異なり、SC 導入により多職種連携が意識された経緯があり、多職種連携への問題意識が成熟していないと考えられる。しかし、医療領域の IPE の概要から示されている通り、多職種連携の態度を育む系統的学習は今後益々重要となり、教育領域でも IPE の系統的学習を開発する必要があるだろう。